



Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of The University of Tokyo

Number.

11

INTERVIEW

メディア史専門の言説空間に「微震」を…

北田暁大助教授インタビュー

「昔は哲学にとっても興味があって、その頃を知ってる人は、今僕がやってることに驚いてるんじゃないかな」と語る北田助教授。著書「嗚う日本のナショナリズム」では、2ちゃんねるも例示として扱った。この本について、研究について聞いた。



Q ご研究についてお聞かせください。

僕の場合、研究は3つか4つぐらい軸があります。1つは院生時代から行っているメディア史。これは例えば広告、映画などを、受けとる側がどのように見ていたのかということや、近代の視覚文化と社会がどのような関係をもっていた

のか、ということを探る歴史社会的なメディア研究で、自分の研究の基軸になっています。それに関連して、メディア理論、コミュニケーション理論などに関する理論的な考察も同時に行っています。また、僕は、理論社会学、政治哲学方面にも興味があって、従来の自由主義理論、政治哲学理論と、ニクラス・ルーマンの社会システム理論を、どう媒介していくのかという作業にも取り組んでいます。この作業は、メディア史研究とは、独立してやってきていたのですが、最近ようやくメディア論との連関が見えてきました。もう1つは、現代社会論で、アカデミズム外の一般読者を意識しながら、現代の社会、若者文化をどのように考えるのか、という問題について考えています。

Q メディア史に関して、どのような方法で分析しているのでしょうか？

例えば、ポスターに関してだと、明治時代の三越のポスターは、美人画ポスターといわれる版芸術で、額縁に入れられたりしていたらしいんですね。一種のアウラを透かし見られていたわけです。それが、1920年代から30年代にかけて、グラフィックなデザイン性に重きが置かれるようになり、受け手への訴求工学的な観点から制作されるようになる。昭和初期のターミナル駅では既に、現在にも通じる広告の乱立状態、通過者の一瞥を捉えようとする「刺激としての広告」の乱立が見られます。ポスターに書き込まれた「内容」を分析するというよりは、ポスター制作を取り巻く社会的言説の配置や、受け手の受容様式に着目し、身体とメディアとの関係性を探り当てる、というのが私のメディア史の方法です。映画館の歴史なども同様の観点から分析を進めています。山積みになった史料をひたすら読み込み、無関係と思われていた点と点がつながるように思

えた瞬間は何とも気持ちいい。「内容」に寄り添えないぶん、史料探しは困難を極めますが、そのぶん達成感は大いなんです。歴史社会学の醍醐味です。

Q 著書「嗚う日本の「ナショナリズム」」は、かなり話題になったようですが。

話題になったというか、ネット上ではポロポロに貶されている、という印象を持っていますが(笑)。もちろん、たしかにそれなりの反響はあったので、ある意味で成功したと思っています。「ああ、僕のことがホントに嫌いなんだな」というだけの批判もありますが、思いもよらなかった理論的批判や、方法論的なレベルでの貴重な意見もいただきましたので、今後のための反省材料にしようと思っています。

現代社会論は、読者自身が生きている。読者自身も知っている対象についての分析なので、絶対に異論、しかもしばしば実存を賭した異論が出てくるんですね。「著者は所詮この程度のことしか知らない!」とか、「こんな少ない事例で社会を語るな!」と言う人はいくらでもでてくる。その多くは正論です。そういう正論としての異論に接したとき、現代社会の多層的な広がりを実感できるし、自分の視座の局所性も見えてくる。だからこそ現代社会論は、沢山読まれて、批判に晒されたほうがいい。書き手としては、現代社会論を書く時は、理論論文を書くときとは違う独特の緊張感が走っていて、端々で「こう書くと、こう怒る人がいるだろうな」などと考えながら、自分の見取り図を提示しているんですね。つまり、現代社会論においては書き手の社会内在性、書くという行為の再帰的性格が前面にでてこざるをえない。社会を対象化し、分析するというパフォーマンスが、社会学者としてのフィールドワークになりうる言説の磁場、それが現代社会論です。本当はあらゆる社会研究が同様の性格を持っているんだけど、現代社会論においてはそうした性格が突出する。きわめてスリリングなフィールドです。

Q 今後は、どのような活動をしていきたいですか？

今までのメディア史研究の延長になると思いますが、歴史社会学の方で、分厚いものを書きたいと思っています。日本近代の200年における、メディアと身体と言語思想の関係について、10年くらいかけて、少しずつ表に出していきたいですね。酒井直樹さんの『過去の声』のような…おこがましいですね(笑)。ともかく、メディア史を専門に研究しているアカデミックな言説空間に「微震」ぐらいは起こせるような厚めの研究を提示したいと思っています。腰を落ち着けて、アウトプットがすぐに出てこないような研究に、没頭する必要を感じています。

TOPICS

寛康明さん(D2苗村研) 東京大学総長賞受賞!



銀杏をかたどった記念品を手に

東京大学の学生を対象に、学業、課外活動、社会活動、大学間の国際交流等において、顕著な功績があった個人または団体に総長が表彰を行う「東京大学総長賞」に、寛康明さんが選ばれた。新しいテーブル型ディスプレイの研究開発(“Lumisight Table”地図情報を4人で共有していても、地名などの文字情報は、それぞれの読みやすい方向に表示される)、その技術を応用したメディアアート作品の制作、寛さんの技術と芸術の境を越えた研究活動が評価された。

受賞したことについて寛さんは、「正直とても驚いております。これまでの自分の活動を評価していただけたことは、自信につながると共に、今後に向けて一層身が引き締まる思いです。私の活動は、多彩な分野の集う学際情報学府だからこそ進められる研究であると思っており、このような環境を提供してくださる学環・学府の教職員の方々や原島・苗村研究室に感謝したいと思います」と述べた。

現在は、実世界指向情報環境の実現に向けて、テーブル型のディスプレイにおける新しい情報提示やインタラクション手法に関する研究を行っており、工学分野における新規性・可能性を常に追求めながら、その技術基盤の上に成り立つ表現やコンセプトを実現することを目指しているとのこと。

今後については、「情報技術を用いて、『人と人とのコミュニケーション』や『人とコンピュータのインタラクション』がより円滑に、より便利に、そしてより楽しく実現できるようにデザインし、それを実際に実世界に組み込んでいくことが目標です。そのために、工学はもとより、芸術・デザインなどの要素を積極的に取り入れて、今後も研究を継続していきたいと考えています」と語った。受賞式は10月11日駒場キャンパス大学院数理科学研究所大講義室にて行われた。

右より
小宮山宏総長、
寛康明さん、
苗村健助教授

ソウル大学との日韓合同授業



学際情報学府では、冬学期授業の一環として、ソウル大学との間でインターネット回線を用いた日韓合同の大学院授業を実験的に実施します。これは、これまでの東京大学社会情報研究所とソウル大学言論情報研究所との長年の学術交流を基礎に、双方の会場をビデオ会議システムでつなぎ、両大学の教員、大学院生が、毎週、越境的に議論を重ねる授業をしていこうという試みです。開催場所は、東大駒場キャンパスの情報教育棟・遠隔講義室と情報学環本館6F実験室、そしてソウル大学の教室の3地点で、これらの3つの会場に集まった大学院生たちが、8週間にわたり議論をし続けます。原則として英語の教材を使いますが、講義は英語、日本語、韓国語で行われ、参加者が相互に訳していきます。担当講師や大学院生の発表を通じ、日本と韓国から見た東アジアのメディアと文化、政治、社会の変化の対する認識を共有、討論していきたいと考えています。

これまで東京大学とソウル大学の間では、共同研究やシンポジウムなどの試みは実施されてきましたが、大学院での一学期にわたる共同授業ははじめての試みです。日本と韓国、そして将来的には中国や台湾、欧米のトップレベルの大学院をインターネット回線でつなぎ、共同で大学院授業を企画運営していくことは、世界的な大学院教育の未来像にとっても非常に可能性を含んだ試みであると考えています。しかも情報学環は、東京大学の中期計画・中期目標の「各部署の重点事項」のなかで、平成17年度実施の5項目のうちの一つとし

て、「国際への展開を目指しアジアの他大学との授業交換実験を開始する」ことを掲げており、この授業によって約束が果たされたこととなります。

とはいえ、今年度はまだ実験段階で、授業を円滑に進めていく上で回線が有効に機能するか、3か国語が混在しての授業で言語の問題をどう解決していくのか、この授業と並行しての双方に開設した授業用Webサイトをいかに共同運用していくのかなど、未解決の問題もあります。しかし、当面の技術的な問題を解決し、また来年度以降は、情報経済や政策、情報行動、ジャーナリズム、コンテンツ、教育など多方面のテーマを取り上げながら、こうした日韓合同の大学院授業を継続的に運営していく仕組みができるなら、学際情報学府の大学院にとっても将来、目玉的な授業の一つになっていくと確信しています。(教授 吉見俊哉)

11月19日はホームカミングデー

情報学環では、ホームカミングデーにおいて、パネルディスカッションを行います。是非、お越しください!

パネルディスカッション

「智慧の環・学びの府：社情研、学環・学府の来し方行く末」

日時：11月19日(土)15:00～17:30 場所：情報学環アネックス2階

概要：社情研、学府を修了して各方面で活躍する方々と現役院生が、その来し方行く末をざっくばらんに話し合います。

パネリスト(予定)：孫盛林氏(社情研卒・人民日報東京特派員)、松田美佐氏(社情研卒・中央大学文学部助教授)、高橋輝子氏(学府修士卒・千葉県庁)、松村誠一郎氏(学府博士課程3年) 司会：水越伸助教授

学環関係者の懇談会 18:00～(学士会分館)

PROJECT

実世界指向メディアテクノロジープロジェクト

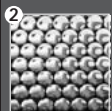
東京大学大学院情報学環 助教授 苗村 健

本プロジェクトでは、空間性(視点依存性)・自己投影性・可触性をキーワードとして、コンピュータの中の記号だけの世界ではなく、物理現象が支配する実世界に根ざしたメディア技術の提案を行ってきました。

空間性(視点依存性)を求めて



① 修士の頃から、空間の情報をまるごと切取ってしまうホログラムのようなメディアの動画版を実現する研究に取り組んできました。これまでに、カメラアレイ(図1)とレンズアレイ(図2:



LIFLET @ SIGGRAPH2004)という2つのアプローチでシステムを実装してきました。

② 一方で、空間的なディスプレイの提案も行ってきました(図3:i-ball @ SIGGRAPH2001)。このような研究における勤所は、見る方向に応じて「見え方」を変化させることにあります。平面的な形状であっても、見え方が変化することで、そこに3次元的な情報を見て取ることができるのです(視点依存性)。

この考えから少し脱線して、卓を囲む4名の座る位置に応じて見え方が変わるテーブル型ディスプレイLumisight Table (@ SIGGRAPH2004)を提案しました。



④ 地図を囲んで見ている、文字はそれぞれに適した方向に表示されるというものです。さらに、これを応用して鏡の中と外に別々の世界を描き出すアート作品が生まれました(図4: through the looking glass @ 2005メディア芸術祭)。

自己投影性を求めて

through the looking glass は、鏡の中の自分自身と対話するところに面白みがあります。このように、インタラクティブな映像メディアにおいて、自分自身の姿は特に重要な意味を持てきます。

自分自身をコンテンツにしてしまう仕組みとして、画像中の各画素にRGBのカラー情報だけでなく温度情報Tを追加するthermo-key (@ SIGGRAPH2003)を実装しました。図3は、体温付近の画素だけCGIに取り替えてしまった例です。そのほか、自分だけモノクロになったり透明になったりと様々な映像効

果を実時間で体験することができます。この技術は映像中のプライバシー保護にも応用できます。

一方、合成画像の中でなく、自分自身の本物の影に豊かな色彩を与えるシステムも実装しました(図6:Graphic Shadow Wall @ UbiComp2005)。自分の分身である影の中にだけ現れる情報は、広告媒体や道案内などに効果的です。

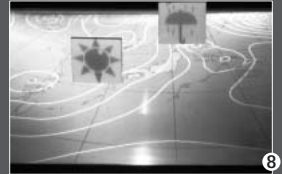


可触性を求めて

Graphic Shadow Wallは、ついに影の中にまで情報が遍在する世界を実現したものです。本プロジェクトではさらに、遍在するコンピュータの存在を感じさせない情報環境の構築を目指し、ひずみ計測技術を応用して、自然物(葉や木など)をインタフェースとして利用する試みを進めています。例えば、木の板がタッチパネルと化してしまうといった具合です(図7: Strino @ UbiComp2005)。

⑦ このように、触れたり掴んだりできるインタフェースは、直感的な操作に適しています。そこで、先に紹介したLumisight Tableを応用して、卓上に白い板を置くだけでそこに映像が投影されるシステムを実装しました(図8@インタラクション2005)。シンプルな白い板で、映像を掴んで動かすことが可能になっています。

本プロジェクトの成果は、紙面やビデオだけでは伝えきれないもので、デモ展示が重要になってきます。毎年入れ替わる学生たちとチームを組んで、大きなイベントをこなしてきたことが、良い思い出になっています(図9)。本プロジェクトに関心をお持ちの方は、ぜひ苗村までお声をおかけ下さい。



NEWS

国際シンポジウム「百科全書解体—ユビキタス社会における民主主義の構想」開催



7月13日、武田先端知ビル武田ホールで、国際シンポジウム「百科全書解体—ユビキタス社会における民主主義の構想」が開催された。21世紀COEプログラム・次世代ユビキタス情報社会基盤の形成の一環として活動を進めている「新しい百科全書」プロジェクトが、情報学環で展開されているアーカイブ・プロジェクトを一挙に紹介し、世界規模の知識人ネットワークを生かして新しい百科全書の構築を進めているマイク・フェザーストン教授やスコット・ラッシュ教授など、英国の新百科全書のチームを迎えて議論を深めるために催したものである。情報学環からは、COEリーダーの坂村健教授の講演をはじめ、石田英敬教授がメディア分析の智慧の樹プロジェクトについて、馬場章教授が坪井家資料のデジタル・アーカイブ化について、吉見俊哉教授が日新聞研資料と戦争とメディア・アーカイブについて紹介した。また、東京大学の知の構造化プロジェクトの基盤となるサーチエンジンを開発した美馬秀樹氏の報告や港千尋氏（多摩美術大学）、龍澤氏（平凡社顧問）を迎えての討論など、充実した内容で大きな成果を得ることができた。

学際理数情報学コース パネル展示



7月8、9日に、本郷キャンパス工学部2号館にて、学際理数情報学コースの研究紹介が行われた。これは、修士課程

受験者を対象に、各研究室が研究内容のパネル等を展示し、受験希望の学生が、直接、教員と話す機会を設けたもの。この研究紹介は、来年度も開催する予定。

平成18年度修士課程入試終わる

平成18年度修士課程入学試験が、8月22日（一次試験）、8月29日、30日（二次試験）に行われた。志願者総数210名のうち、79名（社会情報学コース23名、文化・人間情報学コース32名、学際理数情報学コース24名）が晴れて来年4月より学府の学生となる。

大井町プロジェクト活動報告



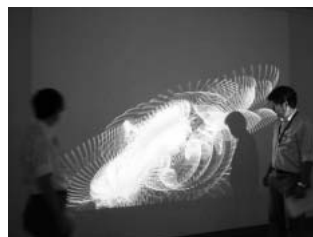
馬場章研究室が過去3年間にわたって継続してきた大井町プロジェクトでは、本年度も品川区立立会小学校の六年生児童50名が科学技術と触れ合い、科学への理解を深めるためのプログラムを、情報学環と提携関係にある日本科学未来館において実施した。

6月28日に佐倉統助教による事前授業が行われ、7月4日、11日の両日に科学未来館見学が実施された。7月14日には見学内容をもとにした児童による成果発表会が立会小学校で行われ、保護者や地域関係者からも高い評価を得た。（助手 添野勉）

「学際情報学環・情報学環 コンテンツ創造科学産学連携 教育プログラム」制作展 【iii exhibition 3】開催

7月7日から9日にかけて工学部2号館展示室にて学生による制作展【iii exhibition 3】が開催された。3回目となる今回は学際情報学環「学際理数情報学研究法Ⅲ」と情報学環コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム「エンタテインメントテクノロジー研究Ⅶ：制作展示プロデュース」の合併授業の一環として

行われ、メディア・アートから映像まで幅広い作品が展示された。制作展の企画、運営は授業の履修生が中心として行った。期間中は学際理数情報学コースの研究紹介（パネル展示）も同時開催され、多くの方にご来場いただいた。次回は12月1日～3日に開催予定。詳細（小規模版）は<http://www.kyokyo.ac.jp/i3e3/>



エリック・ジーマン氏講演会

9月15日、マサチューセッツ工科大学などで講師をつとめる世界的なゲームクリエイター、エリック・ジーマン（Eric Zimmerman）氏を招聘し、馬場章研究室および東京大学ゲーム研究プロジェクトの主催による特別講演会「[ルールズ・オブ・プレイ]を読み解く」が開催された。会場となった山上会館大会議室には、約130名の聴講者が来場し、熱気に包まれた。講演は同時通訳で行われ、国内外で高い評価を受けているジーマン氏の著書「[ルールズ・オブ・プレイ]」の第1章「Core Concepts」を中心に、ゲーム制作には不可欠なゲームデザインに関する自身の理論をわかりやすく解説した。ジーマン氏は、時に身振りをまじえながら熱弁を振るい、講演の締めくくりとして聴講者全員をゲームに参加させることで、実践的に「ルールズ・オブ・プレイ」を体感させた。講演後も、ジーマン氏のもとに質問者が列をなすなど、講演は大盛況のうちに幕を閉じた。（助手 吉田正高）



ワシントンD.C ジョージタウン 大学より—在外研究報告 助手 清原聖子

私は現在フルブライト奨学金を得て、ワシントンD.C.のジョージタウン大学で在外研究をしています。ジョージタウン大学では客員研究員として、自分の好きなようにプランを立て研究しています。受入教員のクライド・ウィルクス教授は大変面倒見が良く、頻繁に研究相談に応じて下さいます。私は一人で図書館にこもるよりも、こちらの先生方や学生と積極的に関わり、将来日本で授業を担当する時に役立つように学生の指導方法も学びたいと思っています。今学期は交渉の結果、自分の研究に直結した授業を3つ聴講させていただけることになりました。

とりわけ興味深い授業は、「ウィリアム・ゴムリー教授担当の「公共政策過程」という講座です。アメリカの政策形成過程分析に役立つ様々なモデルを教授自ら徹底的に解説して下さる他、民主党のトム・ダッセル元上院院内総務をゲスト・スピーカーに招いて下さるなど、アメリカの情報通信政策過程の研究を行っている私には、大変充実した授業です。また、ジョージタウン大学にはCCTという情報学環のコンセプトに類似した学際的な大学院組織もあります。CCT開講科目では、アメリカのメディアの集中やデジタル音楽と著作権問題などが取り上げられ、教授や学生とのディスカッションが毎回非常に楽しみです。残り5ヶ月、研究や教育、留学生の教育支援などできるだけ多くを吸収して、情報学環に還元できるように頑張りたいと思います。



人事異動

教員	
■採用 8/1	桐山孝司 (コンテンツ創造教育研究特任助教)
■昇任 10/1	手塚安澄 (研究協力部国際課 サステイナビリティ学 支援グループ 係長へ)
職員	
■配置換 10/1	関口 健 (研究協力部国際課 連携支援チーム 係主任より)

BOOKS



「武士と天皇」

本郷和人編／新人物往来社

歴史を単なる「知的好奇心」としてではなく（いや本当はそれでも十分に面白いんですけど）、「いま」を考察する試みとして捉えたときに、まず浮かび上がるのは「天皇」の問題です。この本は天皇の位置づけを、時代を通して考えようとしたものです。（本郷和人）

「美術史の7つの顔」

小林康夫・平倉圭（D3田中研）・日高優・香川壇・橋本悟・大原宣久／未來社

ベラスケス、レンブラント、ピカソ、ディックス、ジャコメッティ、ペイロン、ウォーホル。7つの作品の分析をつうじて、絵画における「顔」の問題を考察する論文集。平倉氏の論文「ベラスケスと顔の先触れ」、「斬首、テーブル、反・光学—ピカソ（アヴィニョンの娘たち）」を所収。



発行

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 ● 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 ● e-mail: news@iij.u-tokyo.ac.jp ● URL: <http://www.iij.u-tokyo.ac.jp>

Computer Images by Yoichiro Kawaguchi
編集委員: 荒川忠一(委員長)・林香里・稲葉理恵
発行: 2005年10月